

□海外文献紹介□

リバビリンによる C 型肝炎の治療

Ribavirin treatment for chronic hepatitis C: *Leichard O, et al* (Lancet 337: 1058-1061, 1991)

RNA ウィルス的一种である HCV ウィルスは非 A 非 B 型肝炎の最も重要な原因であり、輸血例の 1~5%に発生し、約半数は慢性化する。現在唯一の治療はインターフェロンの非経口的投与で、長期投与により 50%で肝機能は正常化するが、投与中止後もそれを維持できるのは 10~20%のみである。

リバビリンは、インターフェロン非誘導性のヌクレオシド誘導体である。広い範囲の RNA・DNA ウィルス増殖阻止力があり、RS ウィルス

感染症の治療などにエアゾル方式で使用されているが、催奇形性、胎児死亡などのため広くは用いられていない。ただし発癌性はないとされている。

Ortho 社製 C-103 抗体陽性である C 型慢性肝炎患者、男 7 人女 3 人計 10 人を対象に、リバビリン 1 日 1,000~1,200 mg 分 2 を 12 週間経口投与した。HB 抗原は全員陰性、生検組織診は慢性活動性肝炎 5 例、慢性持続性肝炎 5 例である。リバビリン投与により 10 人全例の血中 ALT 値は低下し、12 週後に平均 3.15 (1.22~7.79) $\mu\text{Kat/l}$ から 1.25 (1.22~7.79) $\mu\text{Kat/l}$ へと有意に低下した ($p<0.005$)。しかし全例で、投与中止後 6 週間以内に再上昇し、

投与前の値に戻った。また、血中ヘモグロビンの軽度低下と尿酸値の軽度上昇がみられ、筋肉痛、嘔気、倦怠感、掻痒感が 1 例ずつ出現したが、いずれも軽微で投与終了後には回復した。

今回のパイロットスタディにより、リバビリンの経口投与が、C 型慢性肝炎患者の血中 ALT 値も有意に低下させることが明らかになった。投与終了後に ALT 値が再上昇するのはインターフェロンの場合と似ている。作用機序は明らかでないが、C 型慢性肝炎に有効な最初の経口薬であると思われる。

(関東通信病院消化器内科

野ツ侯和夫 抄)